

「大学における外国語教育を どう改革するか」

鈴木孝夫氏(慶應義塾大学
名誉教授)が講演

大学教育研究センターが主催した講演会が、慶應義塾大学名誉教授の鈴木孝夫氏を講師に迎え、去る5月10日午後、大学2号館中小会議室で開かれ、教職員80人あまりが聴講した。

開会に先立ち、飯吉厚夫学長が、鈴木氏の経歴とあわせてユニークなライフスタイルを紹介。登壇した鈴木氏も、今日の服装が上から下まで貰い物であることを告げ、会場を笑わせた後、本題に移った。

氏は、日本の国力がこれだけ向上してきたのだから、もっと自立的国家になるべきで、諸外国でもっと日本語を学ばせるべきだという主張をベースに、独自の外国語教育論を展開した。



講演中の鈴木氏

歴史的に見ても日本の外国語教育は、古くは中国から、明治期は欧米からの文化導入の手段として行われ、一貫して他律的であり、太陽があって初めて輝くことのできる月型文化だったと規定した。

そして、各国の言語を目的言語、手段言語、交流言語というカテゴリーに分け、それぞれ分析した。そして、英語教育を英米文学の先生がするのではなく、むしろ、日本の歴史・社会を熟知している社会科の先生がした方が良く、日本についての知識、身近なテーマを英語で勉強すれば習得が早いとした上で、これからは受信よりも発信、他律より自律、月ではなく太陽であるよう心がけるべきで、日本人の自然との共存哲学を世界に発信すべきだと結んだ。